

よろこび

日蓮宗 開聖会

本山 妙國寺

長音山 本誓寺

『よろこび』四十七（幸福とは何かの再考）

貫首 齊藤 日軌

ここまで幸福について考えてわかったことを整理してみたい。

一、幸福の定義は「満足すること」であるが、人は何々ができたなら、何々が手に入ったらと、満足、幸福に条件を付けるので、先ず条件成就が難しい。

二、幸福にはそれを発見できる能力、またそれを感じ、味わい喜べる能力が大切。

三、総てに感謝し、愛を施すことに、また感謝され、愛されることに幸福を感じる。

四、宇宙意識の愛、感謝、喜びの源とつながる。幸福意識の源とつながることである。

以上のように整理してみてもまだ足りないものがある。それは達成することの喜び、幸福である。

勉強で一番になる。オリンピックで金メダルを取る。精神的に成長する。などであるが、それは人が誰かが魂の奥に持っているものである。私の場合は生と死の謎の解明。「悟りの解明」などである。此等は前世からの願いである。人類が神仏から分霊したのである。この進化的魂の成長があるからである。この目的達成に幸福があるのである。



みおしえ

「心はふるいたち

精進（はげみ）つつしみて

おのれを理（とと）のうるもの

かかる賢き人こそ

暴流（あらかなみ）もおかすすべなき

心の洲（しま）をつくるべし（法句經二十五友松圓諦訳）

思慮ある人は、奮い立ち、努め励み、自制・克己によ

って、激流もおし流すことのできない島をつくれ。」（法

句經二十五中村元訳）

鳥（洲）とは、よりどころのことです。お釈迦様は、

悟りをめざして修行するよりどころとして、自灯明法灯

明を次のように説いています。

「アーナンダよ。今でも、また私の死後にでも、誰でも

自らを島とし、自らをたよりとし、他人をたよりとせず、

法を島とし、法をよりどころとし、他のものをよりどころ

としないでいる人々がいるならば、かれらはわが修行

僧として最高の境地にいるであろう。」長部經典一六「大

般涅槃經」（中村元訳）

熱心に心を観じ続ける修行により、正しい知見をそな

え、念をそなえ、貪欲と愛を除いた自己を確立し、その

善き自己と仏法をよりどころとして悟りを目指しなさい

と言う教えです。頼りにすべきもの、真に頼りになるも

のは、自分の外にあるお金や財産、家族ではありません。

心の言葉

南無妙法蓮華経と唱え

善き自己を作りましょう。

